

岡崎氏の経歴

	1955	福井県に生まれる
チェルノブイリ原発事故が発生	1986	江別市へ転居
泊原発の運転可否をめぐる道民投票請求運動	1988	反原発語り手養成講座に参加
アースデイ1990が日本を含む世界141か国で開催される	1990	
第1回えべつ環境広場が開催される	1991	
	1995	循環ネットワーク北海道設立に参加、運営委員
	1999	北海道グリーンファンド理事
		環境省より環境カウンセラーに任命される
札幌市環境プラザが設立される	2003	北海道地球温暖化防止活動推進員
さっぽろキャンドルナイトが初めて開催される	2004	えべつ地球温暖化対策地域協議会事務局
	2005	さっぽろキャンドルナイト実行委員長
		NPO法人環境活動コンソーシアムえこらぼ設立に参加
G8サミットが洞爺湖で開催される	2008	G8サミット市民フォーラム北海道事務局
福島県にて原発事故が発生	2011	



11

岡崎 朱実さん

NPO法人環境活動コンソーシアムえこらぼ
代表理事

「新しい公共」の芽吹き

おかざき・あけみ 1955年、福井県生まれ。1986年、北海道江別市に転居。環境省認定環境カウンセラー、省エネルギー普及指導員、北海道地球温暖化防止活動推進員、北海道グリーンファンド理事、えべつ地球温暖化対策地域協議会事務局、さっぽろキャンドルナイト実行委員長。

市民にはハンディがある

「えべつ環境広場」という名前を耳にしたことはありませんか？
毎年6月に江別市の野幌公民館で開かれている環境イベントで、1991年から続いています。わたしがずっと関わってきた市民運動のひとつです。

「環境広場」だなんて、何かダサイネーミングでしょう？でもこれ、わざとなんです（笑）。お役所が積極的に関わるイベントになって欲しいという思いから、平凡で無個性なほうがお役所的ではないかなと思って、こんな名前をつけました。「えべつ環境広場」は、はじめ地元の市民グループや個人と江別市役所の実行委員会が、いまは実行委員会を母体としてできた「えべつ地球温暖化対策地域協議会」が運営しています。こんなふうに市民と行政とが一緒になって、お互いが協働しあって取り組んでいくこと——そこに真の価値があるとわたしは思っているのです。

昨年（2011年）3月、東京電力福島第一原発の事故が起きて、いま全国で「脱原発金曜デモ」などに参加する人がとても増えていますが、同じような動きが25年前にもありました。チェルノブイリ原発事故（1986年）がきっかけでした。それまで市民運動なんて考えたこともなかったような大勢の人たちが、自ら積極的に反原発運動に加わるようになったのです。

1986年の3月に、わたしは夫の就職で北海道に越してきたばかりでした。ちょうど北海道電力が道内初の原発となる泊発電所を建設中で、札幌などでも「反泊原発」の機運が出てきていました。チェルノブイリ事故2年目ごろになると運動はいっそう盛り上がって、わたしは「これで世の中が変わるかもしれない」と思いました。なぜかという、それまで社会運動というと労働組合^[1]が主導するものでしたが、この時の反原発運動は、たとえば生協に加入しているようなお母さんたちが主役だったからです。ふつうの市民がどんどん意思表示し出したのが画期的に思えました。

[1]労働組合 「労働者が主体となって自主的に労働条件の維持改善その他経済的地位の向上を図ることを主たる目的として組織する団体またはその連合団体」（労働組合法）。

[2]使用済み核燃料 プルトニウムなどの超ウラン元素や核分裂生成物など強度の放射性物質を多量に含み、安全な処分法は確立されていない。

「運動のプロ」じゃないだけに、みんなの思いはシンプルです。放射能汚染事故はいったん起きたら取り返しがつかないし、使用済み核燃料^[2]の捨て方さえ決まっています。「こんな危険な原発をなんで推進するの？」という疑問がすべてでした。東日本大震災を経験して、いま原発を目指すべきだとお考えのみなさんも、きっと同じじゃないでしょうか。

原発が建つ泊村から札幌までざっと60km、江別までは約80kmです。チェルノブイリ級の事故——いまなら福島第一原発級というべきでしょうね——があったら放射能被害は免れません。当時、どんな防災対策を立てているのかと市役所に聞きに行ったら、「別に考えていません」という答え。ショックだったのをよく覚えています。

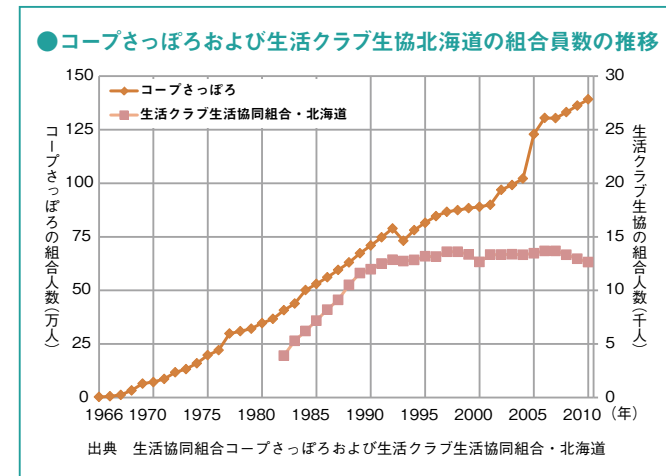
「自分も若かったな〜」と思うこともあります（笑）。交渉ごとなど初めての経験です。環境保全に関する要望書や質問状などを作って江別市や北海道庁など行政の担当者に面会に行ったりするわけですけど、つい感情的になり過ぎたり、時にはけんか腰になってしまったりして、結局対立が深まっただけ、という「不幸な時期」も続きました。当時のわたしを知る行政職員の人たちの中には、いまだにわたしのことを怖がっている人もいるんじゃないかしら。悪い印象を払拭するのにずいぶん時間がかかりました（笑）。

わたしたちが行政に向けて発していた言葉は、激しい批判に見えて、じつはそれは本質じゃなかったんですね。わたしたちのような市民は議論の方法を学んでいないし、交渉ごとだってほとんど初めてです。緊張して話があちこちいってしまったり、真意がうまく相手に伝えられなかったりするのは、むしろ当たり前。いわばハンディキャップを抱えているわけです。行政機関の人たちがもっとじっくり耳を傾けて、背後の思いに気づいてくれたら、結末もだいぶ違ったんじゃないかなとは思いますが。また運動を続けるうち、「市民の思いを行政が汲んでくれないのは、行

政の立場を理解しようとしてこなかった自分たちにも責任の一端があるのでは。もっとお互いを知るようにすべきだ」と考えるようになりました。

けっきょく、この時の運動では原発を止めることはできませんでしたが、大事なことを学んだ気がします。それは、反（脱）原発を成し遂げるには自分たちの現在の生活——ものやエネルギーを大量消費し続ける暮らし方——を変えていく必要がある、ということです。

[3]アースデイ 米国のネルソン上院議員が1970年、4月22日を「アースデイ（地球の日）」と宣言。呼応した学生たちが大規模な記念集会を開催し、その後世界中に広がった。北海道では2007年から「アースデイEZO」が札幌大通公園などで開かれている。



「駐車場」から公民館へ

そこで取り組みだしたひとつが、地元で「環境負荷の少ない暮らしをめざす」活動でした。たとえば食品トレイの値段を調べて展示してごみ減量を呼びかけたり、「アースデイ^[3]」運動が「あなたの街のエコ・チェック25」を呼びかけているのを知って、仲間と一緒に江別市役所に行政施策の環境配慮についてアンケート調査したり。何人かずつで分担して聞きにいったので、質問を受ける担当者の人は、何度も来られて大変だったようです（笑）。

第1回の「えべつ環境広場」は1991年秋に開きました。最初は



「江別環境広場」の会場の様子（写真提供・えべつ地球温暖化対策地域協議会）

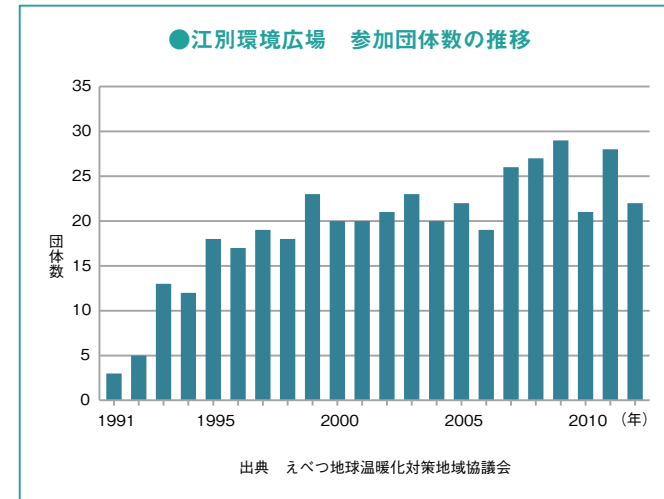
【4】使い捨て時代を考える会
1973年発足。2001年にNPO法人化。事務所・京都市。

わたしの所属する「えべつきれいな風の会」と、お母さんたちでつくる「リサイクルハーモニー」、江別市清掃事務所の共催で、会場は江別市役所前の駐車場でした。翌年はちょうど江別市の人口が10万人を突破した記念イベントが開かれることになり、そこに「環境広場」もまぜていただけて（笑）、いまと同じ野幌公民館に会場が移ったのです。

江別市役所の最初の担当窓口は清掃事務所で、その後、環境課に所管が変わっています。年1回の「広場」の準備をするのに実行委員会を毎月開いて、必ず市の担当者も出席してもらうようお願いしました。それは今でも続いていて、市の広報誌に活動紹介の記事を出していただいたり、映画の上映経費や会場費を市に負担していただいたりと協働が進んでいきました。最初「いつかは市のイベントに」と思っていたのですが、今は一緒にやることに意義があると思っています。

前後しますが、「えべつ環境広場」のヒントになった市民活動を、わたしは京都で学んだんです。1990年、わたしは夫の仕事の関係で京都に1年間滞在しました。そのスジでは有名な「使い捨て時代を考える会^[4]」という市民グループにかねて興味を持っていたので、この機会にさっそくアプローチしてみると、中に「ほかささんといて委員会」という小グループがあることが分かりました。「ほかささんといて」は「捨てないで」とか「捨てずにとっておいて」という意味の京都弁です。

その「ほかささんといて委員会」の人たちが、ほかの市民団体といっしょに年に一度「秋祭り」と称して、広い会場で有機野菜の販売や乾電池の回収、いろいろな会の活動アピール、なぜか歯磨き教室といったものまで（笑）、1カ所にいろんなブースを集めて合同イベントを開いていたんです。ゆったりとした非常に素晴らしい雰囲気、北海道に帰ったら自分でもやりたいと思ったのが「えべつ環境広場」につながりました。



【5】植田勲さん 1935年生まれ。工学、環境社会学者。1979年、京都大学を退職して京都精華大学教員に。「脱原発・共生への道」など著書多数。

【6】植田敦さん 1933年生まれ。独自の「植田エントロピー理論」は反核・反原発運動に大きな影響を与えた。

【7】『環境保護運動はどこが間違っているのか?』1992年、宝島社刊。

広がる「横のつながり」

京都で「使い捨て時代を考える会」を創設したのは、当時京都大学の助教授だった植田勲^[5]さんですが、実兄の植田敦^[6]さんも著名な環境問題の論客です。その植田敦さんが出版された『環境保護運動はどこが間違っているのか?』^[7]は、当時大きな反響を巻き起こしました。この本は、1980年代以降の環境派市民による「素朴なエコロジー運動」を痛烈に批判していました。たとえば、市民や行政によるボランティア・リサイクル活動は従来の回収業者を廃業に追い込み、おかげで経済活動としての不要品取引が絶滅しかかっている、というのです。

この本には異論もたくさん出ました。当たっている部分もあるけれど誤解も多く、せっかく盛り上がってきた市民の取り組みに水を差すもの、という理由です。

本を読んでショックを受けた人たちが、植田さんご本人を講師にお招きして札幌で講演会を開催されました。会場には、普段一緒にならないような方たちがたくさん集まりました。わたし、講演会の内容はよく覚えていないのですが（笑）、それぞれのグル

ープを越えた情報交換ができる機運が高まってきたな、と感じたことはよく覚えています。

道栄紙業の石塚祐江さんを通して「全国牛乳パックの再利用を考える連絡会」の全国大会を札幌で開きませんか、という打診を受けたのはちょうどそんなタイミングでした。

その受け入れ準備会にも、多彩な顔ぶれが集まりました。この面々が大会を成功に導き、また大会後の「循環（くるくる）ネットワーク北海道」結成につながっていくのは、石塚さんが語られているとおりで。

1999年には、ご縁があって北海道グリーンファンドの理事を引き受けすることになりました。わたし自身は、反原発からごみ問題に軸足が移っていたのが、これでようやくまたエネルギー問題に戻ってくることができたと嬉しかったのを覚えています。

1980年代の反原発運動では、原発推進の人たちから「原発がないというなら国民のエネルギー需要を満たす代案を示せ」といつも言われていた気がします。北海道グリーンファンドの「再生可能エネルギーの普及」と「グリーン電力料金制度」という新提案に、わたしは「やっと答えが見つかった!」という思いでした。

ただ、わたしの役割は新エネルギー推進のほうではありません。まず使用電力量を減らす。減らしきれない分を新エネルギーでまかなっていく——という順序が正しいと思います。そんな気持ちを込めて北海道グリーンファンドの理事として最初に作ったのが「Gファイル」、省エネの手引き書です。今でも通用しますので、ぜひ取り入れてみてください。この取り組みで、資源エネルギー庁長官賞をいただいたのですよ（笑）。

プロセスこそ成果

このころになると自治体行政の側もずいぶん変わってきて、積極的に市民の意見を聞こうという姿勢を見せるようになってはき

ましたが、まだまだ考え方にギャップがありました。

江別市が「新エネルギービジョン」をつくることになり、策定委員に「くるくるネット」の神山桂一代表が選任され、わたしもオブザーバーとして参加しました。オブザーバーではありましたが、会議で発言の機会を与えられたこともあります。ところが「新エネルギーの議論だけではなく省エネルギーの対策も必要だ」と述べると、主催者の人たちには思い切りイヤな顔をされていました（笑）。役所の発想と市民の感覚の違いを実感した場面でした。

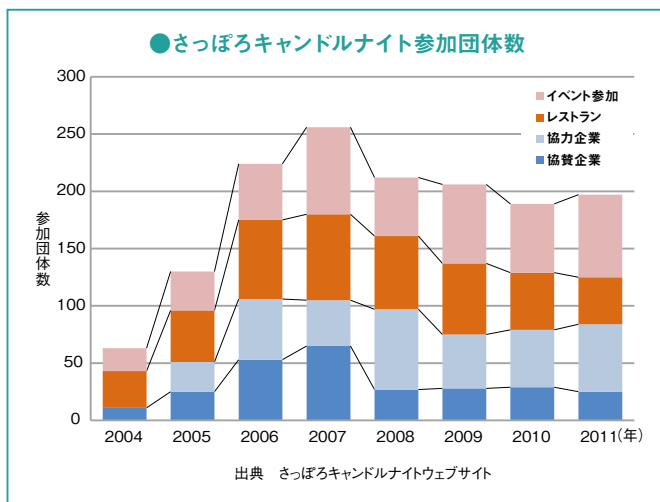
札幌市が2002年3月に開いた札幌市環境プラザに関する懇談会も、試行錯誤の連続でした。市役所の担当課がいろいろな団体・個人に声をかけて「意見交換会」が行なわれたのですが、「初めの数年は札幌市がプラザを直営管理した後、民間に運営を委託する」というような路線があらかじめ決まっていたんですね。委託先として官製のNPOを新設することまで提案されていました。でもこれじゃあ何のための意見交換会かわかりません。案の定、会議は紛糾し、2回目以降は会議の運営方法を見直し、市がテーマを決めた出入り自由の懇談会というスタイルになりました。でもこれだと、議論を積み重ねていくことができません。途中から、会議の運営方法にも、市民が関わるようにお願いし、一緒に準備・運営するようにしていきました。

プラザがスタートした後はわたしたちが懇談会の運営を引き継ぎました。いまは札幌市環境保全協議会の中の「環境プラザ事業検討部会」という正式な会議体になっています。

「さっぽろキャンドルナイト」はこの懇談会から生まれました。1年目（2004年）は札幌市が中心でしたが、2年目以降は札幌市が加わる実行委員会の運営になり、わたしは実行委員長——兼小間使い——として関わっています。趣旨に賛同した飲食店の方たちが本業を通してお客さんたちに環境に関するメッセージを発信でき、主催者と参加者のそれぞれが主役というこの取り組みは、



「さっぽろキャンドルナイト」では、各所に幻想的な光景が浮かび上がる。
(写真提供・さっぽろキャンドルナイト実行委員会)



運営は大変ですが、とてもやりがいのあるものです。

改めて振り返ってみるとなんだか、わたし、本来は行政機関がやるようなことばかりをやっているなあと思います（笑）。しかも江別市民なのに札幌市のことまで、何年も（笑）。

でも「行政だけではできないから市民も一緒にやるんだ」という意識は、市民運動に関わり始めたころからずっと持っていました。

た。わたしが行政と一緒にやることで、ほかの市民のみなさんやグループなどと行政機関との間の「つなぎ役」が果たせたらなあ、とも思って続けてきました。

最近「新しい公共」という用語とともに、こうした役割を果たしながらそれ自体を職業とする選択肢も生まれています。何かのテーマについて、だれでも自分が大事だと思ったことをそれぞれが主役になってやっつけていける、そんな流れができてきたのは、この20年の大きな変化だと思います。

仕事でもないのに、どうしてそんなに長い間、続けられるんですか？ とよく聞かれます。活動の過程でいろいろなことを知る、「分かる」ってとっても面白い、だから続けているのだと思います。最終結果だけが成果なのではなく、そこにいたるプロセスも成果だと思います。そこを行政側がどれだけ理解できるか、そのためにどんな指標を示せるか——。市民と行政が真に協働するためのカギは、そのへんにあるんじゃないでしょうか。

(2012年7月25日取材)